



Title	テ形節の統語構造
Author(s)	三原, 健一
Citation	日本語・日本文化研究. 2013, 23, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26920
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

テ形節の統語構造

三 原 健 一

1. はじめに

本稿は、テ形節の意味類型を論じた三原(2011b)に続くものであるが、そこでの結論のうち、本稿での議論にとって前提となる事項について3点挙げておこう。

(A) テ形節の意味

テ形節の意味類型については、(1a-d)の4タイプを設定するのが最も標準的な見解であるが、「継起」と「原因・理由」は、テ形節事態が起こった後に主節事態が起こる点で共通しているので、「継起」に統一することにしたい。継起と原因・理由は、例えば、主節の述語が心理表現（例えば「驚く」）であるかないかといったように、主節の述語の意味によって区別できる場合が多いのである。名称は、「継起」「並列」はそのままとし、(1a)は「付帯」とする。

- (1) a. 直人はしゃがんで財布を拾った。(付帯状況)
- b. 美穂は紀伊国屋に行って本を買った。(継起)
- c. 彼の話を聞いて心底驚いた。(原因・理由)
- d. 庭には灯籠があって、茶室まで細い道が続いていた。(並列)

(B) 継起節の構造

継起のテ形節は、上で述べたように、意味的には1つのタイプに収束できるが、構造的には2種類のものがあり、このことが本稿での議論と連続することになる。1つはテ形節と主節が別の事象を構成するもので、もう1つは両者が一つの事象を構成するものである。このことは「さえ」焦点化テストを援用することで明らかになる（(2a)の例文は内丸 2006:28 から借用したが、[]表示は筆者による）。

- (2) a. 花子は風邪をひいて[学校を休み]さえした。
- b. 花子は[風邪をひいて学校を休み]さえした。

(2a)において、「さえ」で焦点化されているのは「学校を休み」のみであり、「風邪をひいて」は学校を休んだことの前提となっている。他方、(2b)は、普段風邪をひ

きそうにない花子が「風邪をひいて学校を休んだ」ことが「さえ」によって焦点化されている。本稿では、継起と原因・理由を「継起」に収束させた上で、「さえ」の焦点領域に収まるものを「継起 A」、収まらないものを「継起 B」とする。この区分については、後に、主節末要素の作用域を観察する際により明確にする。

(C) 近接過去

次に、テ形が日本語において近接過去を表す形式であるという論点である。継起の(3)は、遠い過去の事態を表す部分を連用形あるいはテ形で示し、それを主節に結び付けているものであるが、連用形が正文を導くのに対して、テ形の落ち着きが極めて悪い。

- (3) a. その五重塔は、平安時代末期に飛鳥寺の近くに { 建立され/#建立されて }, 戦後になって、奈良市によって今の場所に移されたのです。
- b. 生成文法は、1957 年に Chomsky が文の命題部分を記述する理論的枠組みを { 提示し/#提示して }、それから 40 年後、Rizzi が談話構造を取り組む枠組みを考案するに至った。

テ形が近接過去形式であることは、継起の場合のみならず、付帯・並列においても成り立つと考える。

- (4) a. 少女が[しゃがんで]道端の花を見ていた。(付帯)
- b. [庭には灯籠があつて]、それから、玄関には蹲があつた。(並列)

(4a)の付帯において、「しゃがんで見る」ためには、まず「しゃがむ」という動作が先に起こらなければならない。(4b)の並列でも、[]のテ形節事態を主節事態より先に話者が「認識する」、従って、テ形が「認識的過去」を表すというのが三原(2011b)の論点であった(「それから」の併置がその傍証となる)。

3 種のテ形節に「話者の認識」の観点を組み込んだものを示しておこう。

付帯：主節事態を限定修飾するテ形節事態が主節事態直前に起こり、その後、両事態が時間的に同時並存すると話者が認識するもの。

継起：テ形節事態が主節事態と共存せずに先行して起こり、その後、主節事態が起こると話者が認識するもの。

並列：テ形節事態を先に認識した上で、テ形節事態と主節事態が共存並立すると話者が認識するもの。

本稿では、以上の諸点を前提とし、テ形節の統語構造について論じることにした。

2. テ形節と作用域

2.1 否定の作用域

第2節では、加藤(2005)、吉永(2008)などで援用されている、主節末の否定・モダリティ・命令などがテ形節内まで係るか否かという作用域に関するテストを用いることによって、テ形節が句構造上で3箇所配置されることを論証する。なお、作用域に関して上記の文献とは判断が異なるものも多いが、煩雑さを回避するために、特に言及する必要がある場合を除き、これらの文献との異同を逐次述べるのは避けることにしたい。当節では否定の作用域を見ることにしよう。

テ形節事態が主節事態に僅かながらも先行して起こり、その後、両事態が時間的に同時並存すると話者によって認識される付帯のテ形節は、主節と共に一つの事象を構成するものである。従って、主節末の否定辞の作用域がテ形節にも及ぶと予測されるが、以下に示すように事実はそうになっている。¹

- (5) a. [車を使って被災地に行け]なかった (ので、途中から徒歩で行った)。
 b. [涙を流して謝ら]なかった (のが気にいらなかったようだ)。

(5a)では車を使わなかったのであり、(5b)では涙を流さなかったのである。ここにおいて、[車を使って][被災地に行けなかった]と構造化されるような解釈、つまり、車を使ったという解釈は無理である。

他方、継起のテ形節は、否定辞の係り方に関して2種類のものがある。(6)は継起A、(7)は継起Bの例である。

- (6) a. [わざわざ本社まで行って報告をする]必要はない。
 b. [大学に合格して両親を安心させることができ]なかった。
 (7) a. 犯人は、死体を裏山まで運んで、[なぜかそれを埋めて隠すことはし]なかった。
 b. 朝青龍は、左肘を捻挫して、[大阪場所に出]なかった。

(6a)では本社まで行く必要はないのであり、(6b)では大学に合格しなかったのである。他方、(7a)は、死体を裏山まで運んだ上で、否定しているのは「それを埋めて隠すことをする」の部分である。(7b)でも、左肘は捻挫したのであり、否定の対象となっているのは「大阪場所に出る」の部分である。すなわち、(6)はテ形節と主節が一つの事象を構成し、(7)はそれらが二つの事象を構成していると言えよう。

一つの文で、状況によって2通りの係り方をする場合もある。

(8) a. [檜材を買って風呂を作ら]なかった。

b. 檜材を買って[風呂を作ら]なかった。

(8a)は、檜材を買っては風呂を作らなかったのであり、(8b)は、檜材を買っていながら、それで風呂を作りはしなかったのである。

「さえ」に関する事実も上記の構造化に符合する。

(9) 継起 A

a. 密猟者は、[狩猟禁止区域に入って、雉を撃ち]さえした。

b. 直人は、[重要な書類で計算ミスをして、会社到大損をかけ]さえした。

(10) 継起 B

a. 花子は電車を降りて[忘れ物に気づき]さえした。

b. 花子は風邪をひいて[学校を休み]さえした。

最後に、並列のテ形節については、一律に否定の作用域内に収まらないとしてよいであろう。

(11) a. 結局、A 社は入札して、[B 社は入札し]なかった。

b. 亀山郁夫のドストエフスキーは、紀伊国屋には第2巻だけあって、[三省堂には在庫が]なかった。

2.2 モダリティの作用域

モダリティには、「勝ちそうだ」のように連用形接続となるもの、「勝つべきだ」のように不定形接続となるもの、「勝ったようだ」のように定形接属となるものがあるので、この3種に分けて検証することにしよう。²

付帯のテ形節については、全て文末のモダリティの作用域に収まる。³

(12) a. 彼女なら、[心を許して付き合い]そうだ。

b. [歯を食いしばってやり抜く]べきだ。

c. 犯人は、[鉄パイプのようなもので久美子さんを殴って死亡させた]ようだ。

継起は、A タイプ・B タイプの別に応じて2種の可能性がある。(13)(14)とも、継起を(a-c)で、原因・理由を(d-f)で挙げるが、結果は同じである。⁴

(13) 継起 A

- a. 田中なら、[おせっかいに先生のところに行って報告し]そうだ。
- b. [自分の頭で考えて結論を出す]べきだ。
- c. 彼はいつも、[何が適切か考えて人に助言する]ようだ。
- d. あいつは、[自分の残虐さに気付いて苦しみ]そうにない。
- e. 発表の際には、[メモを忘れて困らないようにする]べきだ。
- f. 彼は、[出生の秘密を知って悩んでいる]ようだ。

(14) 継起 B

- a. 月に光輪がかかって、[何か奇妙なことが起こり]そうな雰囲気だった。
- b. 正月も三が日が過ぎて、[明日からは仕事を始める]べきだ。
- c. 観測船は閉じ込められていた海域の氷を脱して、先ほどの報告によれば、
[ついさっき南極点に到着した]ようだ。
- d. 彼は肝っ玉が座っていて、[そんなことでは怖がり]そうにない。
- e. そんな時は、私のアドバイスを思い出して、[くよくよ悩まないようにする]
べきだ。
- f. 直人は、彼女にふられて、[落ち込んでいる]ようだ。

並列は状況が多少複雑である。下記の(15)のような例では、テ形節が、一見主節末モダリティの作用域内に収まっているように見える。なお、動作述語を用いた場合、「阪神が勝ち進んで、巨人がペナントレースから脱落しそうだ」のように継起の意味に傾斜することが多いので、状態述語の例を挙げる。

- (15) a. 彼は、肝っ玉が太くて、男気がありそうだ。
- b. 大学には、学生用 PC 設備が完備されていて、無線 LAN が使える自習室があるべきだ。
 - c. 大英博物館には、宝冠展示室があって、ミイラの展示室があるようだ。

しかしながら、例えば(15a)において、肝っ玉が太いので男気がありそうだといった原因・理由の意味が感じられ、純粋な並列ではないように思う。「肝っ玉が太くて、男気もありそうだ」のように「も」を用いると、この意味がさらに強化されるであろう。つまり、(15a)でのテ形節は、主節事態に対する判断の前提になっているということである。(15b)でも同様の内包が感じられる。他方(15c)の場合、そのような内包は感じられず、「ミイラの展示室もあるようだ」としても、純粋の並列であるように思われる。

「ようだ」に関して、念のため、動作述語でも確認してみよう。⁵

- (16) a. 今場所は、どうも、[朝青龍が勝ち越して、琴欧州が一敗を守る]ようだ。
 b. A ホールディングスは、[サテライトキャンパスを大阪駅南側に集中させて、商業施設を梅田北ヤードにまとめる]ようだ。

状態述語と同様、テ形節が、文末の「ようだ」の作用域内に収まる解釈が可能であることが分かる。つまり、(15a-c)は、正確には次のように構造化されるべきであると考えられる。「ようだ」のみが並列のテ形節を作用域内に収めるのである。

- (17) a. 彼は、肝っ玉が太くて、[男気がありそう]だ。
 b. 大学には、学生用 PC 設備が完備されていて、[無線 LAN が使える自習室があるべき]だ。
 c. 大英博物館には、[宝冠展示室があつて、ミイラの展示室がある]ようだ。

2.3 命令の作用域

主節末の肯定命令形式は、子音語幹動詞では「hik-e (引け)」, 母音語幹動詞では「make-ro (負けろ)」, のようになるが、いずれのテ形もこの作用域内に収まる。

- (18) a. [辞書をひいて自分で調べ]ろ。(付帯)
 b. [講師の話をよく聞いてメモを取]れ。(付帯)
 c. [部長のところに行ってちゃんと報告し]ろ。(継起)
 d. [今年の文学賞を取って大々的に売り出]せ。(継起)
 e. [自らの魔性を知って苦し]め。(継起, いわゆる原因・理由)
 f. 空手の試合は、[型試合は負けて組み手試合は準優勝し]ろ。(並列)⁶

さて、ここまでの結論をまとめておこう。○は作用域に入ることを、×は作用域に入らないことを示す。連用形 **M** は連用形接続のモダリティ, 不定形 **M** は不定形接続のモダリティ, 定形 **M** は定形接属のモダリティを示す。

	否定	連用形 M	不定形 M	定形 M	命令
付帯	○	○	○	○	○
継起 A	○	○	○	○	○
継起 B	×	×	×	×	○
並列	×	×	×	○	○

付帯と継起 A が一つのまとまりをなし、継起 B と並列が、それぞれ別の類型をなすことが分かる。次節では、この事実を元にして、テ形節の句構造上での配置を確定することにしよう。

3. テ形節の構造

3.1 テ形節の外部構造

本稿で援用する句構造は、Rizzi (1997)以降、地図製作計画 (cartography project) という名称で知られている句構造である。

- (19) [ForceP ... [TopP ... [FocP ... [TopP ... [FinP ... [TP ... [NegP ... [vP ... [VP ... V] v] Neg] T]
Fin] Top] Foc] Top] Force]

ForceP は平叙文や疑問文などの文タイプを決める範疇 (Chomsky 1995), Top(ic)P は主題句を擁する範疇, Foc(us)P は焦点句を含む範疇, そして Fin(ite)P は文の定形性を決める範疇であり、これらは、従来は CP として一括されてきたものである。地図製作計画とは、CP 層 (CP-layer) の「豊かな構造」を明らかにしようとするものであると言えよう。談話情報が関わる TopP/FocP の設定から分かるように、地図製作計画の句構造は、談話との関連も句構造上に反映させようとしているのである。なお、T 位置では「行く」「食べる」「美しい」といった形態 (不定形) のみが決定され、これに定形性を付与するのは Fin の仕事である。英語の不定詞節における to が T 要素とされていることも想起されたい。

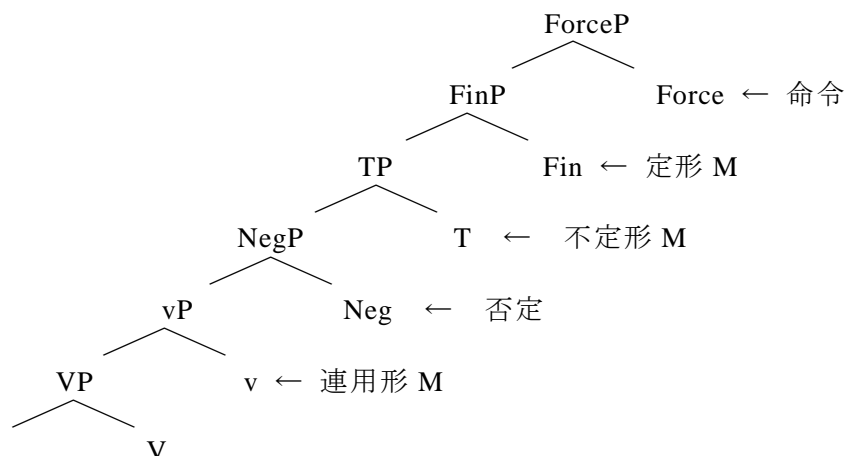
否定辞「ない」(正確には-(a)na)は NegP 主要部の Neg 位置に配置される。命令形式「(ik)-e/(tabe)-ro」については、もう少し詰めたい点も残るが、命令文という文タイプと連動するので、ForceP 主要部の Force 位置に配置することにしよう。

モダリティに関しても、地図製作計画的に割り振られると考える。既に述べてきたように、モダリティには、連用形接続 (そうだ)、不定形接続 (べきだ)、定形接属 (ようだ) の別があった (註 2 参照)。地図製作計画の観点から、活用形の統語論的振る舞いを明らかにしようとする三原(2007a,b, 2011b, 2012)に準拠すると、V 位置に生成された語幹形が v 位置まで動詞移動することにより顕現するのが連用形である。この後、順次 T/Fin/Force 位置まで動詞移動が適用されることにより、それぞれ、不定形/連体形/終止形という活用形が顕現する。⁷とすれば、モダリティも、それぞれの活用形に準拠した形で配置される可能性が浮上しよう。「そうだ (様態)」などは v 位置に、「べきだ」などは T 位置に配置するということである。「ようだ」については、「食べる^うようだ/食べた^たようだ」のように定形の「る/た」が可能なので、地

図製作計画の枠組みを採る時、定形時制が決定される Fin 位置に置くのが妥当であると思われる。

以上の概念化の下に現れるのが次の構図である（活用形と連動しない TopP/FocP を省いて示す）。

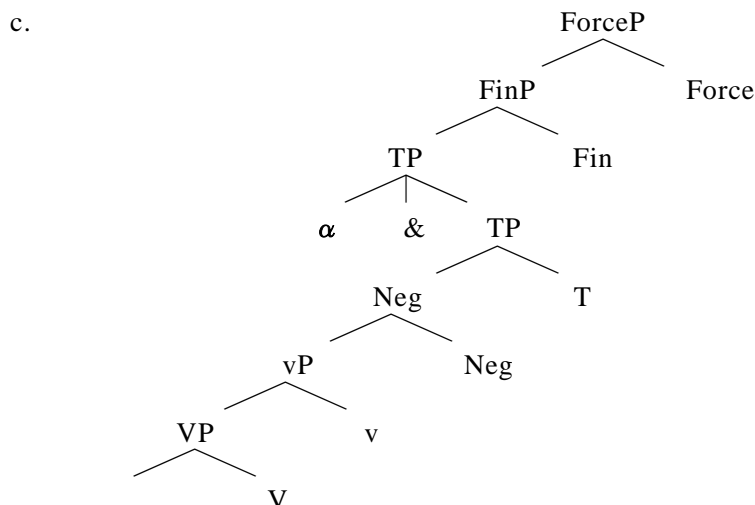
(20)



付帯のテ形節と継起 A のテ形節は、v/Neg/T/Fin/Force 位置に生起する全ての要素の作用域内に入るので、v より下の位置、すなわち(21a)の VP 付加位置に生成される（テ形節を α で示す）。継起 B は、命令の作用域内には入るが、それ以外の要素の作用域には入らないので、Force より下の位置、(21b)の FinP 付加位置に生成されることができる。そして、並列は、命令と定形 M の作用域には入るが、それ以外の要素の作用域に入らないので、Fin より下の位置、(21c)の TP 等位位置に生成されることができる。⁸ 並列のみ、ラベル付き括弧表示では分かり難いので、樹形図で表示することにしよう。⁹

(21) a. [ForceP [FinP [TP [NegP [vP [VP α [VP ... V]] v] Neg] T] Fin] Force]

b. [ForceP [FinP α [FinP [TP [NegP [vP [VP ... V] v] Neg] T] Fin]] Force]



3.2 テ形節の内部構造（1）

当節では、南(1974,1993)の重要な研究を背景として、テ形節内に入り得る要素を確認することにより、テ形節の内部構造を明らかにする。南(1974,1993)にはテ形の文例が少ないこともあり、議論の過程で南とは異なる主張をすることになるが、これが、南の業績をいささかでも損ねるものでないことはぜひとも書いておきたい。

当節では、南の検証方法に準拠して、述語的部分の要素のうちテ形節に収まる（収まらない）ものを確認する。南(1974,1993)では、テ形節は A 類/B 類/C 類に割り振られているが、(22)で、南の分類の後に本稿での名称を付して示す（(22)の例は南 1993 による）。ただし、(22e)は、下で述べる理由で並列に入れてよいと思われるので、本稿での名称は付していない。また、継起 A/B の区分は、テ形節を句構造上のどこに配置するかに関わる区分であり、既に述べてあるように、いずれの意味になるかは文脈や状況に依存するものなので、(22)以降は A/B の区分を取捨して示すことにする。

- (22) a. 首をかしげて走る。(A 類，付帯)
 b. 戸をバタンとしめて出ていった。(B 類，継起)
 c. 左手で吊革にぶらさがって右手ではそばの子供の体をささえていた。(B 類，並列)
 d. かぜをひいて休んだ。(B 類，継起（いわゆる原因・理由）)
 e. A 社はたぶん今秋新機種を発表する予定でありまして，他社の多くもおそらくはそれに対抗する計画を考慮することでしょう。(C 類)

本稿では以下、付帯，継起，並列のテ形節について、それぞれの節内に入る要素を確認することにしたい。まず、述語要素から確認する。¹⁰

使役・受身は全てのテ形節で可能である。

- (23) a. 生徒たちに蛍光ペンを使わせて大事な箇所をマークさせた。(付帯)
b. 寒風にさらされて立っていた(ので風邪をひいた)。(付帯)
c. 弟にお土産を持たせて, 祖父の家に行かせた。(継起)
d. 部下にせつつかれて, 部長に陳情に行った。(継起)
e. 筆記試験は大会議室で受験させて, 面接は第二会議室で行うよう指示を出した。(並列)
f. 田中君の発表が 10 時からに割り振られて, 箕輪君の発表も同じ時刻だったので, どちらに行くべきか迷った。(並列)

次に, 定形接属の「だろう」は全てのテ形節に入らないが, 事実は明らかであると思われるのでデータは割愛する。定形の「る/た」ももちろん入らない。「まい」については, 「(まさか) 食べるまい」のみならず, 「(まさか) 食べまい」のようなものも, そもそもテ形が存在しない。意志・勧誘の「う/よう」も同様である。

否定については, 南は付帯(A 類)のテ形節に入らないとしているが, (24a,b)のように言えるものが多数ある。また, (25)のように, 継起, 並列では南の言う通り可能である(ただし, 南は文例を挙げてはいない)。

- (24) a. 足をそんなに上げないで走りなさい。(付帯)
b. お前たちは, 道端にしゃがみ込まないで仲間と話せないのか。(付帯)
(25) a. 窓を閉めないで, しばらく空気を入れ替えて下さい。(継起)
b. 直之は昔から酒を飲まなくて, 多分タバコも吸ったことがない筈だ。(並列)

さて, ここまでの結論をまとめておこう。テ形節に収まる要素, 収まらない要素に関して, 付帯, 継起, 並列は全て同じ振る舞いを示すので, この観点からすれば, 3種のテ形節の内部構造は同一であることになる。すなわち, 3種のテ形節は, 句構造の同じ部分を利用する構造を持つという見通しが立つということである。次節において, この「同じ部分」が TP であることを論証したい。

3.3 テ形節の内部構造(2)

当節では, 述語的部分以外の要素に関して, テ形節内に収まるもの(収まらないもの)を確認する。ただ, 名詞句に格助詞や後置詞が付いたものは, 全てのテ形節に入ることが明らかなのでデータは省くことにする。

まず, 動詞句副詞(南は程度副詞と状態副詞に分けている)については, 問題な

くテ形節に収まり得る。

- (26) a. 藤原は口をかたく結んで黙っていた。(付帯)
 b. ビールを一気に飲んで、間髪置かず二杯目を注文した。(継起)
 c. 壇上には、花が凜と生けてあって、巨大な国旗が掲げてあった。(並列)

次に、南は、場所と時の修飾語は A 類の付帯には入らないとしているが、(27)に見るように、これは明らかに可能であろう。(27)での場所及び時の修飾語は動詞句副詞なので、(26)での動詞句副詞が可能である以上、理論的にも(27)が可能な筈である。(28)のように、継起、並列ではもちろん収まり得る。

- (27) a. 外で冷氣にあたって考えた。
 b. 叔父の姿が見えたので、木の上で手を振って呼んだ。
 c. 数秒間加熱して曲げた。
 (28) a. 藤田が{昨日/ホテルで}書類を書いて、それを田中が先生に届けた。(継起)
 b. 一昨年は灯籠が表庭にあって、昨年は玄関先にあった。(並列)
 c. 社長宅には灯籠が表庭にあって、専務宅には玄関先にあった。(並列)

(27a)の「外で」は、「冷氣にあたって」「考えた」の双方を修飾可能だが、(27b)の「木の上で」は、「手を振って」のみを修飾している。「呼んだ」に係るのであれば「木の上から」になる筈である。さらに、時の修飾語である(27c)の「数秒間」では、「数秒間曲げた」とは言えないことに注意されたい。付帯のテ形節事態は、わずかながら主節事態に先行して起こり、それが主節事態と同時並存するので、事態の生起を表す時の修飾語では、「2時半頃ナイフで刺して殺したものらしい」のように、「刺して」「殺した」のいずれを修飾しているか判然としない。が、「数秒間」のような期間副詞を用いて、かつ、動詞のアスペクト特性をも考慮に入れる時、テ形のみを修飾する文例が可能なのである。¹¹

主語については、南は付帯のテ形節のみがこれを許さないとしている。が、生成文法の枠組みを採る時、付帯のテ形節にも PRO 主語が設定されるので、このことが付帯と継起・並列を分ける積極的な根拠とはならないとすべきである。

文修飾副詞についてはどうだろうか。南は、「多分」「まさか」の類は A 類・B 類とも収まらないが、「実に」「とにかく」「やはり」の類は、A 類には収まらないものの、B 類では可能としている。¹² 南の言う、前者の「多分」類は真偽判断の文副詞であり、後者の「実に」類は価値判断の文副詞に相当すると思われるが(文副詞の名称は中右 1980 による。文副詞の分類については、Jackendoff 1972, Bellert 1977

なども参照), 実際には, 真偽判断の文副詞や価値判断の文副詞は南の付帯(A類)・
継起(B類)とも可能である。

(29) 真偽判断の文副詞

- a. 彼は, 先生の前では, まさか足を組んでは座らないだろうが ...。(付帯)
- b. これは, 恐らくハンマーのようなもので叩いて, 球状にしたのだろう。(付帯)
- c. 長兄が, 多分, 次男をそそのかして, 次男がその誘いにのったものと思われる。(継起)
- d. 犠牲者は, 兎町のバーで, 恐らくホスゲンのような有毒ガスを噴霧されて, バーを出たところで息絶えたのだった。(継起)

(30) 価値判断の文副詞

- a. あいつは, 通夜なのに, やっぱり赤い服を着て来た。(付帯)
- b. 何をさておいても, とにかく学部長に報告して, その後で対応策を考えよう。(継起)

(29a,b)の「まさか」「恐らく」は, 「座らない」「球状にする」に係っているのではなく, 「足を組んで」「叩いて」を修飾していることが見て取れるだろう。また, (29c)の「多分」は, 「そそのかして」「誘いにのった」の双方を修飾可能だが, (29d)の「恐らく」は, 息絶えたのは既定の事実であるから, 「噴霧されて」に係っているのである。

次に主題(南は「提題」と呼んでいる)については, 南は, A類・B類双方で不可能としている。確かに, 対照主題であれば, 継起, 並列はもとより付帯でも可能だが, 純粹主題はさすがに無理である。

- (31) a. 細心の注意は払って読んだんですけど, 見落としてしまいました。(付帯, 対照主題)
- b. 私は細心の注意を払って書類を読んだ。(付帯, 純粹主題)
- c. 私_iは[PRO_i細心の注意を払って]書類を読んだ。

(31b)は(31c)の構造を取り, 純粹主題「私は」は「書類を読んだ」に係っている。

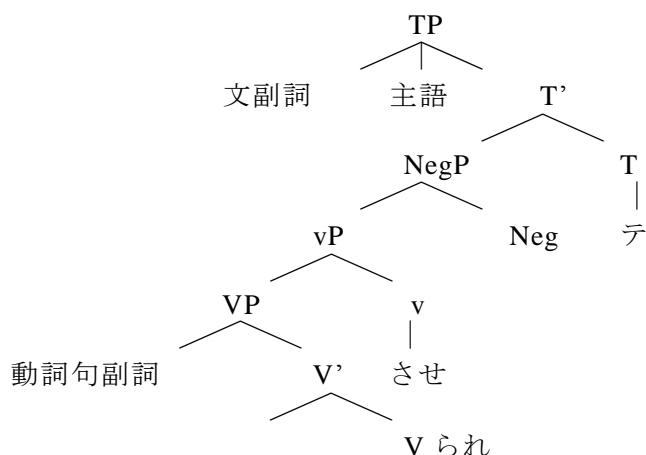
3.4 第3節のまとめ

第3節では次のことを論じた。使役の「させ」及び受身の「られ」は自由にテ形節内に現れ得る。¹³ 動詞句副詞は, 時・場所の修飾語を含め, 全てのテ形節内に収

まる。つまり、vP 内要素（させ）と VP 内要素（られ、動詞句副詞）は可能ということである。vP の上にある Neg 主要部の否定もテ形節内に生じることができる。そして、文修飾副詞も全てのテ形節において可能である。(29)(30)で挙げた文修飾副詞が、TP 領域内に生じる要素であるとすれば、テ形節では、vP/VP/Neg 要素のみならず、TP 内要素が可能という一般化が得られる見通しが立つ。主語に関する事実がこのことを裏付ける。主語は TP 指定部に生起する要素であるが、付帯の場合は音形を取らない PRO 主語になることが多いものの、主語自体は全てのテ形節に現れることができる。¹⁴ 他方、TP 上位の Fin 要素である定形の「る/た」はテ形節内に生じない。次に、TopP 領域にある純粹主題に関しては、全てのテ形節において無理である。

以上のことを総合すると、テ形節とは、(32)の構造を取るもの、すなわち、句構造の TP 部分を利用する構造であるということになる。

(32)



残るのは「テ」を句構造のどこに配置するかである。テの位置に関しては、アスペクト標識として T 位置に置く立場（金水 1993）、VP 付加構造のテをアスペクト標識とし、TP 等位構造のテを等位接続詞であるとする立場（内丸 2006）、一律に等位接続詞とする立場（Tamori 1976-1977、ただし句構造上での位置は明示していない）など諸説がある。が、以下のことを考慮すると、テンス標識として T 位置に配置するのが妥当であると思われる。

三原(2011b)で論じたように、テは、話者がテ形節事態を主節事態より「先に」認識したことを表す近接過去形式であると考えられる。すなわち、テは、「る/た」が表す定形時制ではないが、可能未来（possible future）を表す英語の to 不定詞と同じ位置（T 位置、Stowell 1982）に配置するのが妥当であると考えられる。次に、V 位置に生成された語幹形が、v 位置まで動詞移動して顕現するのが連用形、そこから Neg 位置まで動詞移動して現れるのが否定形式（註 7 参照）であるという見解（三

原 2007a,b, 2011b, 2012) に準拠すると、例えば、「食べ（連用形）」「食べなく（否定形式）」として顕現した形式が、さらに T 位置まで動詞移動した結果現れるのが、「食べなくて」というテ形式であるとする事ができるのである。

参考文献

- Bellert, Irena. (1977) On semantic and distributional properties of sentential adverbs. *Linguistic Inquiry* 8: 337-351.
- Chomsky, Noam (1995) *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, Ray S. (1972) *Semantic interpretation in generative grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 加藤陽子(1995)「テ形節分類の一試案：従属度を基準として」『世界の日本語教育』5：209-224.
- 金水敏(1993)「日本語の状態化形式の構造について」『平成 5 年国語学会秋季大会要旨』：21-29.
- 三原健一(2004)『アスペクト解釈と統語現象』東京：松柏社.
- 三原健一(2007a)「Very short verb movement」『日本語文法学会第 8 回大会発表予稿集』：82-90.
- 三原健一(2007b)「動詞移動と活用形」『Conference handbook 25: The twenty-fifth conference of the English Linguistic Society of Japan』：53-56.
- 三原健一(2008)『構造から見る日本語文法』東京：開拓社.
- 三原健一(2011a)「活用形と句構造」『日本語文法』11 巻 1 号：71-87.
- 三原健一(2011b)「テ形節の意味類型」『日本語・日本文化研究』第 21 号：1-12. 大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻海外連携特別コース.
- 三原健一(2012)「活用形から見る日本語の条件節」三原健一・仁田義雄（編）『活用論の前線』：115-151. 東京・くろしお出版.
- 三原健一・平岩健(2006)『新日本語の統語構造』東京：松柏社.
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』東京：大修館書店.
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』東京：大修館書店.
- 中右実(1980)「文副詞の比較」國廣哲彌（編）『日英語比較講座 2：文法』：157-219. 東京：大修館書店.
- Rizzi, Luigi (1997) The fine structure of the left periphery. In: Liliane Haegeman (ed.) *Elements of grammar*, 281-337. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Stowell, Tim (1982) The tense of infinitives. *Linguistic Inquiry* 13: 561-570.
- Tamori, Ikuhiro (1976-1977) The semantics and syntax of the Japanese gerundive and infinitive conjunctions. *Papers in Japanese Linguistics* 5, 307-360.
- 内丸裕佳子(2006)「形態と統語構造との相関—テ形節の統語構造を中心に—」博士論文. 筑波大学.
- 吉永尚(2008)『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』大阪：和泉書院.

註

¹ 以下、主節末の否定・モダリティ・命令の作用域を鉤括弧で示すと共に、それらの作用域内に入るテ形節に下線を付して示す。

² 連用形接続のモダリティには、他に希望の「たい」、意志・勧誘の「よう」などがあり、定形接属には「らしい/かもしれない/（伝聞の）そうだ」などがある。なお、日本語における不定形（infinitive）については別稿の用意があるが、「{勝つ/*勝った} べきだ」「参加 {する/*した} ことができる」のように、「(r)u」形のみが容認されるものを念頭に置いている。

³ 吉永(2008)のテ 2（付帯のうち「ながら/まま」などで書き換え可能なもの）も(12)と同じ振る舞いになる。

- (i)a. あいつなら、[ウソ涙を流して謝り]そうだ。
 b. [講師の言うことをよく聞いてメモを取る]べきだ。
 c. この料理は、どうも、[よくかき混ぜて煮た]ようだな。
- ⁴ (13f)(14f)は、そこで示したものと逆は、それぞれ、[出生の秘密を知って][悩んでいるようだ]、[[彼女にふられて落ち込んでいる]ようだ]という解釈も可能である。つまり、継起 A 読みになるか、継起 B 読みになるかは文脈や状況にも依存するということである。(14e)も 2 通りの作用域解釈が可能であろう。
- ⁵ (16a)で「どうも」がない場合、「今場所は、朝青龍が勝ち越して、[琴欧州が一敗を守るようだ]」という作用域解釈も可能なように思えるが、筆者としては、「朝青龍が勝ち越していて」としたいところである。
- ⁶ (18f)は吉永(2008)の例を参考にした。吉永は、並列は主節末の命令の作用域に入らないとしているが、(18f)のようにこれは可能であろう。類例を挙げておこう。
- (i) 本年度は、[学部生の最終試験を 2 月 15 日にして、院生の修了試験を 2 月 20 日にし]なさい。
- ⁷ 否定形式(例えば *tabe-na*)については、これだけで独立した活用形として存在しないので、否定形を活用形とはしない。
- ⁸ α の統語範疇については次節で明確にする。なお、付帯と継起では α を付加 (adjunction) 位置に生成させているが、これは、テ形節が副詞節として機能し、副詞節は付加位置に生成するという生成文法の慣例に従ったものである。他方、並列は、主節の TP に等位接続された構造を取る。(21c)での「&」は、TP 付加でないことを示すために便宜上入れたものである。
- ⁹ テ形節の句構造上での位置を明確に論じたものは、管見によれば、Tamori (1976-1977)、内丸(2006)、吉永(2008)を数えるのみであろう。(21)で示したものは、これらの文献とは構造化が異なる部分があるが、本稿との異同を詳細に述べるのは避け、簡単に述べるに留めたい。
- Tamori (1976-1977)は、テ形節が従属節構造をなすとした上で、テを従位接続詞であるとしているが、意味類型の差に基づく構造的違いについては詳細には論じていない。他方、吉永(2008)は、付帯と継起を VP 付加、因果を TP 付加、並列を TP 等位としており、本稿と類似する点がある。そして、内丸(2006)は、付帯を VP 付加、継起、原因・理由、並列を TP 等位としている。
- ¹⁰ 南が挙げている授受表現と尊敬表現は、南の検証でも全てのテ形節に収まるという結果が出ているが、これらは複合動詞形成として別に論じるべきではないと思われる。また、丁寧形(「ます」形)については、句構造上での位置付けに関して筆者の考えが確定していないので、その扱いについては後日に期したい。
- ¹¹ 南(1993:117)では、下記のように、連用形を伴う A 類の「ながら節」で場所の修飾語を伴う例があったことが報告されているが、これは、テ形節においても一般的な現象であろう。下記例を「にじませて」「うずくまって」としても正文が得られる。
- (i)a. 額に汗をにじませながら
 b. その中でじっとうずくまりながら
- ¹² 南は、「多分」「まさか」類は C 類では可能としているが、C 類のテ形節は、他のテ形節と区別する根拠が薄弱であると思われる(三原 2011b 参照)。
- ¹³ 下の(32)で示すように、本稿では、三原(2004)及び三原・平岩(2006)に従い、「させ」は小動詞 *v* が音形を取って具現したもの、(直接)受身の「られ」は語彙的動詞 *V* の接辞と考えている。
- ¹⁴ 付帯では PRO 主語になることが多いとはいえ、(i)において波線で示す非対格動詞を用いた場合、音形を取る主語も可能である。
- (i)a. 私は、学会発表のときメモを忘れて、[頭が真っ白になって]しゃべった。
 b. 我々が駆けつけたときには、兄は、[既に心臓が止まって]倒れていた。
 c. 僕には[風景がゆがんで]見えた。